

研究報告書要旨

緩和ケアの現場における僧侶の活動

田 丸 裕 昭

1 序論

1.1 背景

- 1.1.1 現代における看取りの場所
- 1.1.2 仏教の現状
- 1.1.3 緩和ケアについて
- 1.1.4 緩和ケアの現場について

1.2 本報告書について

2 本論

2.1 座学・研修で得たこと

2.2 緩和ケア病棟における僧侶としての活動

- 2.2.1 活動した緩和ケア病棟について
- 2.2.2 勤行・法話
- 2.2.3 環境整備
- 2.2.4 コミュニケーション
- 2.2.5 仏教関連の相談
- 2.2.6 ケアチームの一員としての活動

3 結論

- 3.1 活動を通して学んだこと
- 3.2 考察
- 3.3 今後の課題

序 論

現代社会における仏教の役割とは何か。苦悩を抱える人々に対して、僧侶はどの様に関わればよいのであろうか。これらの問いについて、座学・研修を通して答えを探る中で、筆者は、人々の抱える苦悩の根幹的なものが、仏教が説く四苦、生老病死に起因しているのではないかと考えた。現代社会において、生老病死の四苦の問題が直接的に表出する場所の一つとして、

緩和ケアの現場が挙げられる。医療現場において、日本では数は少ないが、僧侶はビハーラ活動を展開している。本報告書においては、筆者が2010年4月から2013年3月まで行った、座学、研修、実際の活動について、その中において主に、2012年4月から2013年3月まで、緩和ケア病棟において常駐の僧侶として勤務したことについて記し、緩和ケアの現場で僧侶が活動する意義について考察する。

2 本論

2.1 座学・研修で得たこと

筆者が、ビハーラ活動を実践することを選んだきっかけは、タイ王国のいくつかの寺院において、緩和ケアが実践されているということを知ったからである。また、それらの寺院において、生前に同意を得た上で、施設で亡くなった方の遺体を展示しているということも知らされた。死を身近に感じながら生きていくことが、人生を意味深く豊かにするものではないかと考え、いのちについて問い続け、探求していきたいという思いを抱いたからである。実際に現場で僧侶として活動するための実力を身につけるために、患者とその家族とコミュニケーションを取る実習や、参加者間で辛い思いをケアし合う実習を行った。また、2011年12月から2012年3月まで、筆者は、ある仏教を背景とした緩和ケア病棟にてボランティア活動を行った。研修やボランティア活動を通して、がん患者、および、病棟スタッフと継続的に関わったこと等、様々な経験が得られた。

2.2 緩和ケア病棟における僧侶としての活動

筆者は、2012年4月から2013年3月まで、ボランティア活動を行った緩和ケア病棟とは異なる、仏教を背景とした緩和ケア病棟で、常勤の僧侶として活動する機会を得た。筆者が常勤僧侶として活動した緩和ケア病棟は、院内病棟型27床の緩和ケア病棟で、大きな特徴として、仏像が安置された仏堂があるということが挙げられる。朝夕の勤行・法話、仏教行事、患者が亡くなった際のお別れ会で利用される他、宗教・宗派を問わず患者とその家族が出入り自由な場所として、仏堂は24時間開かれている。病棟には、常勤の僧侶が一人配置されていて、仏堂における勤行・法話等の仏教的行為の他、患者とその家族の日常の手伝いを行っている。また、近隣の寺院に所属する僧侶12名程が、ボランティアとして出入りしている。病棟においては、患者とその家族の宗教・宗派および信仰によって入院を制限されることはない。宗教的勧誘やお参りの強制といった行為は、一切行われていない。以降に、筆者が常勤僧侶として行った具体的な活動を示す。

筆者が勤務した緩和ケア病棟では、毎日の朝夕、15分程の勤行・法話が、常勤の僧侶およびボランティアの僧侶によって行われる。独歩、車椅子、ベッドごと等、様々な患者が様々な移動手段で来られ、参加していた。筆者は、勤行・法話を行う以外にも、車椅子、ベッドで参加する方の案内や、病室にて参加する方に経本や数珠を渡すこと等、お参りの手伝いを行った。また、仏堂において、お別れ会の司会および導師や、焼香の際の読経も行った。お別れ会後に葬儀会社の迎えを待つ間、患者の家族から様々な思いを伺ったり、仏事についての相談を受けたりする機会もあった。

以上の他にも、患者からの要望に応じて、患者の家族の月命日・年忌法要を、仏堂・病室にてお勤めすることもあった。

仏堂の整備、ペットの世話、テラスの花の水やり等、病棟の環境整備も行った。環境整備を行っている際、患者とその家族とコミュニケーションが生まれることもあった。院内の環境を整えることももちろんであるが、環境整備する行為自体も、患者とその家族とのコミュニケーションに繋がる、重要なことであると感じた。

筆者は、患者とその家族と日常的に関わっていく中で、様々なコミュニケーションを取った。患者とその家族から、世間話や、病棟で過ごしていて感じたこと、病棟に入院されるまでの気持ち、自身のこれまでの人生での出来事等を伺うこともあった。体の痛みや倦怠感等を伺い、スタッフに伝えることもあった。辛い気持ちを伺うこともあった。また、「人は死んだらどうなるのか」「私はお浄土に行けない気がする」といった、死生観や仏教に関する問いを聞くこともあった。筆者は辛い気持ちや死生観および仏教に関する問いに対して、その問いの背後にある思いを大切に共に関心を持って共に考え悩むことを心掛けた。

入院中の患者とその家族から、仏教関連の相談を受けることもあった。仏教に関する相談には、その背景に様々な思いが込められていることを、患者とその家族と接する中で学んだ。

緩和ケア病棟においては、患者とその家族に対して、様々な側面を考慮して、最適なケアを受けられるように、医師、看護師、臨床心理士、および、一般ボランティア、僧侶等、それぞれの専門性を持ったスタッフが関わる。筆者は、常勤僧侶として、患者とその家族との関わりについて記録すること、病棟スタッフが一同に会するカンファレンスの場において情報提供を行うこと等を通して、病棟スタッフおよびボランティアの僧侶との情報共有や連携を心掛けた。一方、病棟スタッフから僧侶に、患者と関わって欲しい、患者から訴えを聞いて欲しいという要望を受けることもあった。

以上、様々な活動を行った。それらを踏まえ、結論として、活動を通して学んだこと、考察、今後の課題を示す。

3 結 論

3.1 活動を通して学んだこと

筆者は、座学において、死も人生の一部として捉えて生きることの大切さを学び、僧侶として末期の患者とその家族と関わっていききたいという思いで研修やボランティアに取り組み、そして、緩和ケア病棟において常勤僧侶として実際に活動する機会を得た。一年間の勤務の中で、100人以上の患者と、患者のご家族と関わる機会を得た。患者とその家族は様々な背景や思いを持って緩和ケア病棟を利用しているということを見聞きした。それらの背景や思いから、患者とその家族が最期の瞬間までどのように過ごしたいかということを大切にすることが重要であると学んだ。

患者とその家族との関わりから、仏教について改めて考えさせられることもあった。緩和ケアの現場において、生老病死の四苦を、日常的に目の当たりにすることを通し、そこで活動する僧侶自身が仏教についての理解と味わいが育まれるのではないかと考える。

3.2 考 察

以上より、筆者が、緩和ケア病棟に一年間勤務した経験を基に、僧侶が緩和ケアの現場において活動する意義について、考察する。

患者とその家族が日常的に行っていたお参り・年忌法要等を病棟内で行えることが、僧侶が緩和ケアの現場で活動する意義の一つではないかと考える。日常的に行っていたお参りができることに加え、病状が悪化し、今まで行ってきたことが徐々にできなくなる中で、手を合わせる環境が整っているということは患者にとって心の支えになるのではないかと考える。遺族の死別による悲嘆を受け止めることも、重要な役割ではないかと考える。

仏教について話し合いたい患者とその家族に対して、僧侶がいて仏堂がある環境は、意義があると考える。人生の意味についての問い、死ぬことが怖い、死にたい、死んだらどうなるかという訴え等に対して、比較的長い時間を確保し、僧侶として向き合い、共に悩み考えること、必要に応じて仏教の教えを適切な形で伝えることも、意義あることではなかろうか。患者とその家族との関わりのきっかけともなる環境整備も、重要であると考えます。

仏教関連の相談を行いやすい僧侶が病棟にいることは、患者とその家族にとって、意義あることではないかと考える。患者とその家族が仏教に関する相談に込めた思いを伺い、応えることも、重要な意義があると考えます。それらの様々な思いから伺う訴えや要望は、他職種では聞く可能性の低い、僧侶だからこそ表出しやすい訴えや要望であることも考えられるからである。

僧侶の立場より、患者とどういった関わりがあったかということを他スタッフと共有することに重要な意義があると考え。医療スタッフではない僧侶としての視点をケアチームに伝えることが、患者とその家族を様々な側面から捉え、最適なケアを提供する一助となるのではないかと考える。また、僧侶が緩和ケア病棟に常勤する役割の一つとして、他の僧侶が活動しやすい環境を整えることがあると考える。

緩和ケアの現場で活動する僧侶自身にとっても、様々な意義があるのではないかと考える。現場から生老病死の四苦の実際を学ぶということや、仏教に対する理解と味わいが深められることが考えられる。また、緩和ケアの現場における活動と日常の法務とが相互に影響し合い、仏教に対する理解と味わいの他、現代社会における人々との関わり方に対する考えも深められると考えられる。

以上より、僧侶が緩和ケアの現場で活動することには、様々な意義があると考え。

3.3 今後の課題

筆者が常勤僧侶として活動するにあたり、様々な課題が明らかになった。勤行・法話、環境整備、コミュニケーション等の一つ一つは、患者とその家族にとってどんな意味を持つのか。また患者とその家族は人生の最期に何を求めるのか。その人にとって仏教はどのような意味を持つのか。人生にとって救いとは何なのか。今後、僧侶として患者とその家族と関わる際、それらについて考えつつ関わりながら、僧侶が緩和ケアの現場で活動する意義を探究していきたい。

参考文献

書籍

- 水野弘元『仏教要語の基礎知識』春秋社 2010
 長上深雪他『現代に生きる仏教社会福祉』法蔵館 2008
 浄土真宗本願寺派ビハラー実践活動研究会編『ビハラー活動—仏教と医療と福祉のチームワーク—』本願寺出版社 1993
 田宮仁『「ビハラー」の提唱と展開』学文社 2007
 藤丸智雄『「般若経典」を読む』角川学芸出版 2007
 高橋聡美編『グリーフケア—死別による悲嘆の援助—』メヂカルフレンド社 2012

論文

- 田畑正久「なぜ、今、仏教が医療・看護・福祉の領域で求められているのか」『真宗学』121 2010

HP

- 東京ビハラー ホームページ
<http://tokyo-vihara.com/index.html> (2014年1月10日アクセス)
 臨床スピリチュアルケア協会 (PASCH: Professional Association for Spiritual Care and Health) ホー

ムページ

<http://www.pasch.jp/> (2014年1月10日アクセス)

米国臨床牧会教育協会 (ACPE: Association for Clinical Pastoral Education) ホームページ

<http://www.acpe.edu/> (2014年1月10日アクセス)

日本ホスピス・緩和ケア協会 ホームページ

<http://www.hpcj.org/what/definition.html> (2014年1月10日アクセス)